



Title	HAVE構文のevent構造について
Author(s)	早瀬, 尚子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1994, 28, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47821">https://hdl.handle.net/11094/47821</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# HAVE 構文の event 構造について

早瀬 尚子

## 0. 序

この論文では「have+Object+Infinitive」という形式を持つ have 構文について考察する。この構文は大きく二つの意味をもつものに分けられる。一つは have の主語が causer と解釈される使役の have 構文と、何らかの影響を被っている experiencer と解釈される受身の have 構文とがある。

(1) She had her students write some essays. (使役)

(2) She must have her varicose veins burst on her. (受身)

この have 構文に現れることのできる event はどのようなものか、その event 構造について、因果関係に基づく causal chain という概念を用いて明らかにするのが本稿の目的である。

この小論の構成は次の通りである。まず1節では使役及び受身の have 構文について見られるいくつかの特徴を見る。2節では causal chain の概念を導入し、これを用いて3節でそれぞれの構文に見られる特徴を統一的に説明することを試みる。4節はまとめである。

## 1. have 構文の特徴

この節では、使役の have 構文と受身の have 構文の、それぞれの諸特徴を見てゆきたい。

### 1.1 Causative-have 構文

使役の have についてはこれまでも様々な研究がなされてきている。ここではそのうち四つの特徴に焦点をあてて議論を進めたい。

まず、使役の have 構文に表れる主語についての特徴を見てみよう。この構文では主語が [+agentive] であることが要求される。

- (3) a. Mary had me change my mind.
- b. \*The confusion had me change my mind.
- c. \*What he did had me change my mind.

Mary は [+animate] であり、また意図を持って主体的に働きかける能力をそれ自体持っている、典型的な agentive subject といえる。一方、the confusion の場合にはそのような能力を認めるのは一般に難しい。このことが (3 a) (3 b) の差を産んでいるといえる。

ただし、この特徴は have の主語単独の特徴ではなく、have の補文に来る event の性質にも依存することに注意したい。例えば、補文の動詞によってはいくら [+agentive] な主語が表れたとしても不適切になるからである。では次に補文の動詞の性質について見て行こう。

Baron (1974) で議論されていることだが、使役の have 構文の補文には [+stative] の性質を持つ動詞は表れることができない。

- (4) a. Donald had Paula play the score of Beethoven's Fifth.
- b. \*Donald had Paula know the score of Beethoven's Fifth.

(cf. Baron 1974 : 320)

ここで、play は明らかに [-stative] なアスペクトを持つ動詞であるのに対し、know は変化を伴わない [+stative] な動詞である。この対照からも分かるように、have の補文には [+stative] の動詞は来ることができない。

[-stative] の動詞の中にも、have 構文に生起できるものとできない

ものとがあるという事実にも注目したい。周知のように、自動詞には意図的にコントロールすることができる行為を表すものと、コントロールできない行為を表すものとがある。前者は walk などに代表される非能格自動詞 (unergative verb) であり、後者は die 等の例があげられる非対格自動詞 (unaccusative verb) である。この非対格自動詞は使役を表す have 構文には一般になじまないようである。

(5) a. \*John had Mary / his canary die.

b. \*John had his daughter fall (and break her leg).

c. \*John had his only child grow.

ここで動詞の性質の方に着目すると、これらの動詞は全て非対格自動詞であり、補文の主語が意図的にその出来事を引き起こせるようなものではないことが分かる。die というのは一般に（自殺を除いて）コントロールできないものであるし、fall / grow も意志とは関わりのない行為である。

ここまで見てくると、上でみた動詞と先ほどの [+stative] の動詞 (know) とは幾分似通っている点があることに気づく。つまりどちらも補文の主語が主体的に引き起こすことのできない種類のものである。以上のことから、have の補文に生起できる event (以下 core-event と言う) は、(補文) 主語の働きかけをもって引き起こされるタイプのものであることがわかる。

もう一つの特徴は、have 構文が非強制的な使役を表すという点である。次の例に見られるように、強制的意味を持つ表現と使役の have 構文とはうまく共起しない。この対比は同様に迂言的使役を表す使役の make 構文と比較すると更にはっきりする。

(6) a. \*The trainer had the lion enter the cage by beating it  
with a whip. (Baron 1974 : 334)

(7) a. Bill had Mary type his manuscript

- { by asking her to do so.
- { \*without respecting her will.

b. Bill made Mary type his manuscript

- { \*by asking her to do so.
- { without respecting her will.

ここからわかるのは、補文の主語は自分自らの意志を持って行為を行うものであるということだ。よってここに意志を持たないいわゆる無生物が来るとあまり適切でなくなる。

(8) a. Bill had Mary roll down the hill.

b. \*Bill had a log roll down the hill.

以上まとめると、使役の have 構文は次のような特徴を持つ。まず、have の主語は意志を持って行為を引き起こす causer であること、第二に have の補文には意図的にコントロールできる種類の event がくること。そして三つ目に have の補文の主語は自らの意志を持って行為を行う agent であること、である。

## 1.2 Experiencer-have 構文

受身の have 構文では have の主語はその補文で表される行為の受け手、つまり experiencer (経験者) である。補文の行為によって何らかの影響を被るものとして位置づけられる。

このことに関連して、先ほど使役の have 構文としては受け入れられなかった例も、そのいくつかは受身の解釈を許されるものがある。特に、以下のような例は使役として解釈されないものだった。

(9) a. John had Mary / his canary die (on him).

b. In the experiment, one subject changed when given only the information that some people have something happen to their arm when they relax.

つまり、受身の have 構文では、使役の have とは違って、補文主語の主體的な働きかけがなくてよいことになる。

また(9)の例で気がつくように、この受身の have 構文にはもう一つある特徴がみられる。それは have の主語に言及する再帰的な前置詞句が文尾に存在する、もしくは生じることができる、というものである、この表現は受身解釈を揺るぎないものにする働きをもつ。使役の have と受身の have とで解釈の可能性が両方ある曖昧な例でも、主語に言及する句、典型的には前置詞句が共起すれば、experiencer 読みが得られる。

(10) a. John had all the students walk out on him.

b. The shuttle had a meteorite crash into it.

c. John had Mary / his canary die on him.

もう一つ、Ritter and Rosen (1993) は experiencer-have 構文について興味深い指摘を行っている。それは have 動詞の主語が experiencer である受身の have 構文では、その補文で表される event が [+delimited]<sup>1)</sup> である必要があることである。

(11) a. \*Pat had his corn grow.

b. Pat had his corn grow six feet tall.

(12) a. \*Pat had Terry drive his car.

b. Pat had Terry drive his car into the wall.

(13) a. \*Pat had Terry eat his pâté.

b. Pat had Terry eat all his pâté.

(Ritter and Rosen 1983 : 528)

(a)の例では core-event は最終到達点を持たないという点で [-delimited] である。「とうもろこしが育つ」といってもどのくらい育ったのかということは明確ではない。同様に「車を運転する」もそれ自体では event は境界を持たないままだし、「パテを食べる」もパテの総量がわからなけ

ればその event の最終点は不明のままである。これを(b)のように変えて、当該の core-event を区切りのあるものにすると、experiencer 読みが可能になる。

以上まとめると、受身の have 構文では core-event に対する補文主語の意図性といった制約は見られないこと、再帰的な表現が見られるのが特徴であること、更に、core-event が境界を持つ [+delimit] なものであるほうが容認される、という三点について考察した。

## 2. Causal Chain Analysis

この節では1節の現象を説明する枠組みとして Croft (1991) で提唱されている causal chain の考え方を紹介する。

Croft (1991) は event 構造と動詞の関わりを因果関係に求め、これを記述するのに causal chain というモデルを提示している。一つの動詞は一つの単純な (simple) event を表す。この単純な event は causal chain の概念を用いると次のような構造を持つものとして描かれる。

- ・ event は causal chain の一つの segment である。
- ・ event には参加者が参加者に対して働きかけるというエネルギー伝達が関わる。
- ・ エネルギー伝達は非対称的なものである。
- ・ event に対応する一連の causal chain は枝分かれしない。

これは event についての理想化された認知モデル (ICM : cf. Lakoff (1987)) として規定される。このモデルに合致する event は典型的なものであり、あらゆる言語で共通にみられるタイプのものである。また合致しないものはいわば周辺的なタイプであり、また一つの言語内でもその表し方が様々になってくる。

エネルギーの伝達ということに関していえば、その伝達のタイプには典

型的に CAUSE、BECOME、STATE の三つが考えられる。ある参加者がエネルギーを発し (CAUSE)、別の参加者がそのエネルギーを受けて何らかの行為、変化をおこし (BECOME) て最終的な状態へと至る (STATE) のである。

〈Figure 1〉     . ———→ . ———→ . ——— .  
CAUSE BECOME STATE

このcausal chain 分析では、break 等の他動的な状態変化を表す動詞は〈Figure 2〉のように、またそれに対応する自動詞用法の動詞、及びいわゆる外項を持たないとされる非対格自動詞は〈Figure 3〉のように、それぞれ表される (###で区切られる部分が動詞の意味で表される範囲である)。

〈Figure 2〉     . ———→ . ———→ . ——— .     : He broke the win-  
CAUSE BECOME STATE     dow.  
###       break       ###

〈Figure 3〉     . ———→ . ——— .     : The window broke.  
BECOME STATE  
###       break       ###

walk 等の非能格動詞は自分の意志で始めることのできる行為を表すので CAUSE-arc を含むが、それ自体では結果状態には至らないので次のように表される。

〈Figure 4〉     . ———→ . ———→ .     : He walked along  
CAUSE BECOME     the beach.  
###       walk       ###

また、know, like 等の状態を表す動詞は STATE-arc のみから成り立つものとして表される。



<Figure 5>

· ——— · : He knows French.  
STATE  
### know ###

### 3. Have 構文再考

この節では、2節で導入した Causal Chain Analysis の枠組みを用いて、1節でみた諸特徴を記述することを試みる。3.1で使役の have 構文について、3.2で受身の have 構文について、それぞれ述べてゆきたい。

#### 3.1 使役の have 構文の event 構造

1節でみた使役の have 構文の特徴は、have の主語が意志的に働きかける causer であることと、補文で表される event が意図的にコントロールできる種類のものであり、補文主語もそのような意志を担うものであるということだった。特にこの補文の特徴を causal chain の概念で表すならば、次のようになるだろう。

- (14) 使役の have が付加される core-eventは その対応する causal chain において CAUSE-arc を持っていないなければならない。

Have の主語およびその働きかけが、エネルギーの発進者 (initiator) を明確に持つ core-event に付くことによって、更に event を拡張することになるのだが、その時に、event を表す causal chain は相変わらず全体で一つとみなし得る、ギャップのないものでなければならない。つまり、have 構文全体でエネルギーの流れが途切れることのない一つの chain を成していなければならないのである。

Have 構文で表される出来事が単一のまとまりをなすとみなされる証拠は三つほど挙げられる。まず一つは否定との関わりである。Have 構文では主動詞 have を否定すると補文内容も同時に否定されてしまう。

- (15) \* John didn't have Mary do the work, but she did it any-

way.

(15)に見られるように、have の部分と補文の do the work の部分とを切り離して分けて考えることはできないので、event が緊密に結びついていているといえる。

二つ目の証拠として、時間副詞の修飾の仕方が挙げられる。Have 構文では主文の生起する時点は補文の生起する時点と異なってはならない。

(16) \*Yesterday the teacher had students play on the ground today.

(16)は、yesterday は have 動詞にかかる時間副詞で、today は補文動詞 play にかかるようにと意図された文であるが、このような文は実際には受け入れられない。このことから、主文動詞と補文動詞の生起は異なるものではなく、一連の行為として捉えねばならないとわかる。

更に三つ目の証拠として、have 構文によって引き起こされる補文内容成立の含意を否定することは無理であることが挙げられる。

(17) \*John had Mary do the work, but she couldn't because something important came up.

but 以下の後続文が不適當であることからわかるように、John had Mary do the work と言った時点で Mary は仕事を遂行してしまっているのである。つまり、have で他に働きかけたならそのすぐ後に補文内容は生じてしまう。

以上三つの点から使役の have 構文で表される event は全体で単一の event と捉えられる。つまり、have と補文動詞で形成される一種の複合動詞が一連の分かつことのできない causal chain を形成するといっている。

このように考えてみると、CAUSE-arc を持たない core-event と使役の have 構文とが相容れない理由は簡単に説明できる。Have という動

詞を付加することによって、その主語は補文主語に働きかけて行為を達成する *causer* となる。また、1 節で見たいくつかの諸特徴からわかるように、補文主語は自ら対象に働きかけてその行為を行うものである。ここにエネルギーの受け渡しに関与するのである。とすれば、もし補文の表す event 構造内に CAUSE-arc が存在しなければ、そこでエネルギーの伝達が途切れてしまうことになり、この途切れによって、問題となる event を単一の event とみなすことができなくなる。<sup>2)</sup>

エネルギー伝達を表す *causal chain* が途切れることで文が容認できなくなるといふ例は他の現象でもいくつか見られる。例えば、因果関係的な連結が行われないものを動詞が一つの event として表すことはない。

(18) a. The boat sailed into the cave.

b. \*The boat burned into the cave. (Croft 1991: 160)

(a) の状況では *sailing* という行為が「洞窟にはいる」という動きを引き起こしているので一つの *causal chain* を構成すると考えられるが、(b) の状況を考えると、*burning* という行為が「洞窟にはいる」という動きを引き起こしていない。これを何とか *causal chain* で表そうとしても、二つの event 間をつなげることは概念的に考えられない、つまりつなげようとする *chain* の途中に何らかの *gap* が生じてしまうのである。このような event は因果的関連のない二つの独立した event としてみなされるため、一つの動詞(句)を用いて表すことはできないことになる。<sup>3)</sup>

もう一つ、因果関係の連結が損なわれているために不適切となっている例を、別の現象からひいてみよう。

(19) \*The bear frightened the campground empty.

熊が出てきて脅威を与えたことによってキャンプ地に誰も人がいなくなったのであるが、ここでは the bear, the campground、そして最後の empty という状態との間に連続する *chain* は形成できない。熊が驚かし

たのは「キャンプ地」ではなく、キャンプ地にいた「人々」だから、この点でスムーズなエネルギーの流れが途切れていることになる。

また、もしこのようにエネルギーの途絶えが生じている状況を表そうとすれば、単一ではない他の表現という手だてに訴えねばならなくなる。例えば、二つの異なる別々の動詞や節を用いて各々の event を表すというやり方等がこれに当たる。

(20) a. The boat was burning as it entered the cave.

b. Since the bear frightened the campers, the campground became empty.

このように、「一つの文では途切れのない causal chain を構成する」ということが、have 構文にとどまらない一般原則として要請されるのである。

先ほど 1 節で、非対格自動詞は使役の have 構文となじまないことを見た。この事実も同様に説明することができる。非対格自動詞は意図的にコントロールできない行為を表すために、causal chain で表すと CAUSE-arc を持たず、その表す単一項は BECOME-arc の始端に対応するものとなる。

<Figure 6>

・ ———→ ・ ——— ・ 例: The goldfish died.  
BECOME STATE      Something happened.

従って、動詞 have に当たる segment を付加しても、have の主語から始まる causal chain 全体でみるとエネルギーの伝達は中断されてしまう。これでは have 構文が全体で一つの event を表すという構文自体の要請と合致しない。よって、非対格自動詞が have 構文にこられない理由は一連のエネルギーの伝達が途絶えてしまうからと説明できる。<sup>4)</sup>

(21) a. \*John had Mary / his canary die. (Causative)

b. \*John had the riot happen. (Causative)

同じことが他動詞の起動的 (inchoative) 用法でも観察される。

(22) a. \*John had his daughter fall down. (Causative)

b. \*John had the tomatoes grow. (Causative)

これらに対応する他動的状态変化動詞は、causal chain で表せば CAUSE-arc を含むことになるので、have 構文に何の問題もなく生じることが出来る。

(23) a. John had Bill fall the ball into the well. (Causative)

b. Pat had John grow her corns. (Causative)

c. John had the gardener grow the tomatoes. (Causative)

d. The general had the army sink the boat. (Causative)

<Figure 7> John corn (corn)

grow(他) . → . → .

: John grew the corns.

CAUSE BECOME

### grow ###

corn (corn)

grow(自) . → .

: The corns grew.

BECOME

### grow ###

また、非能格自動詞の場合には CAUSE-arc が認められるため、エネルギーは伝達を阻止されることなく一連の chain を構成することができる。

(24) a. I had my child walk along the beach.

b. The teacher had students talk as they liked.

<Figure 8> ### HAVE ### walk / talk ###

. → . → . → .

CAUSE BECOME

**<Figure 9>**

### HAVE ###                      ### like ###

• —————→ • ..... • —————→ •

STATE

### 3.2 受身の have 構文の event 構造

(25) I had my daughter fall and break her leg.

この *experiencer* は通常 *causal chain* の終点に位置し、心理的な影響、経験を受けるものと規定される。(26)の例では、胃痛によって「痛み」を経験し、その影響を被っている。同様に、(25)では娘が倒れて怪我をするという *event* を経験することで影響を被っているといえる。

ここで問題としている構文に生じる have は、その主語が experiencer であり、エネルギーを引き起こす始発者ではなく、受け手、つまり causal



- (31) 受身の have 構文に生起する core-event はその対応する causal chain の最後において STATE-arc をもたねばならない。

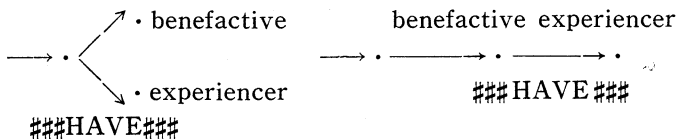
また、1 節で再帰表現が出てくると experiencer 読みが強くなるという事実を指摘したが、これも現分析ではどうなるか、少し考えてみたい。

ここで出てくる再帰表現は、いわゆる benefactive (もしくは malefactive)<sup>6)</sup> に当たるものと考えられる。一般に benefactive は行為の最終点に位置する参与者でその行為の受け手を表し、動詞に相当する causal chain 部分の後に続くものである。次の文では Mary がそれに当たる。

- (32) I broke the boulder for Mary.
- I            boulder    Mary  
 . —————→ . —————→ .  
 ## break ##  
 <Figure 11>

さて、この再帰表現が明示的に存在する場合、core-event と have 動詞とをあわせるとどのような causal chain が考えられるだろうか。ここでは少なくとも二通りの可能性が考えられる。一つは core-event の影響が、benefactive で表される参与者と experiencer として表される have の主語との両方に及ぶという考え方である。もう一つの可能性は、再帰表現を含む core-event の後に、have の主語が表れるような chain を形成するというものである。

<Figure 12>



前者の考え方は実は、2 節で述べた「一つの event は枝分かれしない



causal chain を形成する」という、event の理想化された認知モデルに根本的には合致しない構造を成している。しかし、この構造をとったとしても依然 ICM に合致する可能性が一つだけある。それは benefactive と experiencer とが同一の参加者を表す場合に限られる。つまり、枝分かれが一つの chain に統合される場合であり、逆に(33b)(34b)のように別々の参加者を示す例は排除されることになる。そして事実その通りである。(cf. Belvin (1993))

(33) a. The shuttle had a meteorite crash into it (=the shuttle).

b. \*The shuttle had a meteorite crash into the wall.

(34) a. John had all the students walk out on him.

b. \*John had all the students walk out on the supervisor.

一方、後者の考え方によれば、再帰形で表される参加者が have の主語に対して心理レベルで更に影響を与えているということになるが、実際にはそのような心的活動は存在しない。よって、causal chain の最後の二つの arc に因果関係がなく無理があるので、不適切となる。但しこれも先ほどと同様に、もし benefactive と have 主語の experiencer とが同じ参加者を表しているとすれば、二つの arc を同一参加者の心的変化を示すという観点から、あわせて一つの arc とみなすことができ、自然な chain が形成できることになる。

〈Figure 13〉 students (students)                      John    John  
 . —————> . —————> . —————> . —————> .  
 ###                      walk    ###    out                      on    ##HAVE##

つまり、どちらの構造を仮定したとしても、再帰形と have 主語とが同一参加者を示している限りは、問題なく一つの event を表す causal chain を形成することができる。

また、event を経験し、影響を被るという causal chain の流れをスム

ーズにするのが再帰形表現と考えられる。影響を与えたかどうかという問題は、どちらかといえば物理的性質を持つ使役に比べると判定しにくいものである。実際、使役でも受身でも解釈できる曖昧な例は多く存在する。しかし、ここでもし再帰形があれば、experiencer へ向けての chain の布石が得られることになり、受身読みを強固なものにすると考えられる。

以上、受身の have 構文に見られた諸特徴を causal chain 分析の観点から説明した。Have の主語は core-event を経験し、その影響を受ける experiencer であることから、core-event の後について causal chain をつなげるものであること、その構造から、非対格動詞が問題なく生起できること、また再帰形表現が自然な chain を構成するのに貢献していることを示した。

#### 4. まとめ

本稿では、causal chain の概念を用いて、have 構文に生起する補文に対しての制約を規定した。使役の have 構文では causal chain において CAUSE-arc を持つ core-event が要求され、受身の have 構文では最後の STATE-arc までを持つ core-event が要求される。そしてこの core-event に対する制約と、単文では一連の causal chain を成す単一の event が表されるという一般原則から、have の補文に来る event のタイプへの制限及び解釈の区別が導かれる。使役の have 構文の場合、主語は causer なので、have を付加しても依然エネルギーの流れを保持するためには core-event に CAUSE-arc が不可欠である。また受身の have 構文の場合、主語は心理的な影響を被る experiencer なので、STATE-arc が存在する方が無理なく have の主語への chain がつくられる。

## 注

- 1) ここでの [+delimited] は Tenny (1994) で用いられている概念を指す。
- 2) Make-Causative の場合は have-Causative と異なり、core-event に対する制限がそれほどきつくない。例えば非対格自動詞であってもよいわけである。これは、make 自体が CAUSE-arc を導入すると考える可能性がある。同様の考え方は Ritter and Rosen (1993) にも見られる。
- 3) 次のような場合には burning によって移動がひきおこされることになるので、因果関係が認められ、適切となる。

(i) The branding iron burned into the calf's skin.

(Croft 1991 : 161)

- 4) Unaccusative でも have 構文に来られる場合がある。これは文脈による 'director reading' ができる場合 (Ritter and Rosen 1993 : 527) であり、この場合補文主語の volitional な解釈が可能である。

(i) Ralph had Sheila die in his movie.

(Ritter and Rosen 1993 : 527)

この解釈は in the movie という句によって表されるように、「映画で Sheila という役割を死なせた」というもの。この場合、Sheila は意図的に自分の「死」をコントロールできることになる。このような異例の状況では、派生的に (CAUSE) arc が強制されたと想定される。

- 5) Causal-reverse verbs はいわゆる典型的な causal chain でいう主語と目的語とが逆に配置されている点で有標 (marked) である。詳しくは Croft (1991 : 253) 参照のこと。
- 6) 用語は Croft (1991) に従った。

## 参考文献

- Baron, Naomi S. (1974) "The Structure of English Causatives," *Lingua* 33, 229-342.
- Belvin, Robert (1993) "The Two Causative *Haves* Are the Two Possessive *Haves*," *CLS* 29, 61-75.
- Croft, William (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations*, University of Chicago Press, Chicago.
- Croft, William (1994) "Voice: Beyond Control and Affectedness," *Voice: Form and Function*, ed. by Barbara Fox and Paul J. Hopper: 89-117, John Benjamins, Amsterdam.
- Givón, Talmy (1975) "Cause and Control: On the Semantics of Inter-

- personal Manipulation," *Syntax and Semantics* 4, ed. by John P. Kimball, 59-89, Academic Press, New York.
- Ikegami, Yoshihiko (1990) "'HAVE/GET/MAKE/LET/+Object+(to) Infinitive' in the SEU Corpus," 『文法と意味の間』 181-504、くろしお出版。
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*, University of Chicago Press, Chicago.
- Ritter, Elizabeth and Sara T. Rosen (1993) "Deriving Causation," *Natural Language and Linguistic Theory* 11: 519-555.
- Shibatani, Masayoshi (1976) "The Grammar of Causative Constructions: A Conspectus," *Syntax and Semantics* 6, ed. by Masayoshi Shibatani: 1-40, Academic Press, New York.
- Talmy, Leonard (1976) "Semantic Causative Types," *Syntax and Semantics* 6, ed. by Masayoshi Shibatani, 43-116, Academic Press, New York.
- Talmy, Leonard (forthcoming) "The Windowing of Attention in Language," *Essays in Semantics*, eds. by Masayoshi Shibatani and Sandra Thompson.
- Tenny, Carol L. (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer Academic Press, Netherlands.

(文学部助手)